



## アウトソーシングについての切実な話

谷 愛子

大図研のみなさまこんにちは。いつもお世話になっています。3ヶ月前に子どもが生まれ、現在育児休暇中です。親の目は節穴。赤ん坊のあまりのかわいさに暇さえあればつい抱っこばかりしてしまい、毎日書架移動でもしているような肩・腕・腰・手首痛の日々です。でもそういえば同じ業界にこの産前産後休暇、育児休暇も取りたくても取れない環境で働いている人もいるのだな、と改めて他人事ではないと思いをいたし、すっかり赤ちゃんボケした頭で何とかひねりだしたのが以下の文章です。

図書館業務のアウトソーシングの一環ということで、図書館業務を業務委託したり人材派遣会社を利用する例があります。指定管理者制度のもと、公共図書館では民間に図書館業務を委託するところが近年増加しています。大学図書館でも一部業務を委託したり一昨年6月少しニュースにもなった江戸川大学や、近くの例でいえば奈良の畿央大学のように図書館を全面的に業務委託で運営するところも出てきました。導入事例の報告が図書館や受注業者によってなされ、図書館運営上のメリットやデメリットが指摘されています。その際に当然といえば当然ながらあまり触れられないのですが、気になるのが業務委託や派遣の現場で働く人たちの待遇のことです。

(次頁へ)

### [目次]

アウトソーシングについての切実な話	…	1
2006年近畿4支部新春合同例会に参加して	…	3
続京大図書館史こぼれ話 第三回	…	5

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール : [dtkk@rg7.so-net.ne.jp](mailto:dtkk@rg7.so-net.ne.jp) (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

大図研の会員のなかにもいらっしゃるでしょうが派遣会社や委託受注業者を通じて図書館で働いている方がたのほとんどは時給 1000 円前後で働いているのが現状でしょう。具体的な数字でざっと考えると単純計算で一日 8 時間（昼休みの 1 時間は労働時間に入れられない場合は 7 時間）で 1 日 7-8000 円、一ヶ月 20 日勤務として保険や税金を引くと手取り一ヶ月 10 万円ちょっとから多くて 15 万円。夏休みなどで出勤日が減るとその分収入が減る。今の日本で自活するには年収 300 万円は欲しいところですが、それよりかなり低い額にとどまっています。そして給与額と同じく問題なのが雇用契約が 1 年契約など短期の契約になっていて不安定なことが多いことです。

給与が低く抑えられることや雇用が不安定なことは昔からある非正規職員の問題と共通しますが、委託や派遣で図書館で働く人たちは専任職員の削減が進むにしたがい、本来専任職員が担当していたようなかなり中心的な業務も任される場合があります。これがアルバイトを増やさずに、比較的割高な派遣や委託に切り替える理由のひとつでもあります。全面委託の場合は図書館業務全体を完成することを外部に委託するわけですから、現場は図書館業務の企画立案など含めて全般を担当することになります。と一つも委託契約、派遣職員の立場からの制約もあり仕事の自由度は低い。

派遣や委託で働く人の労働条件が低く抑えられる問題は、他業種でも広く見られることです。その理由は派遣についていえば、もともと雇用主（派遣会社）と使用者（派遣先）が違う間接雇用というその仕組みからして相対的に立場の弱い労働者の待遇が悪くなる危険が高いこと、派遣労働について規定する日本の労働者派遣法が労働者保護の観点から見ると不十分なこと、派遣元である派遣会社による法令違反行為が後をたたないことなどがあげられます。業務委託についても、業務を請け負う際に業者同士の価格競争などにより委託料が安くなり、安い委託料で利益を出すにはどうしても人件費が安く抑えられてしまいます。

全面委託の一例をあげようと、この原稿を書きながら NPO 法人が受託して運営する山中湖情報創造館ホームページをのぞいてみればタイミングよく「平成 18 年度 山中湖情報創造館スタッフ募集のお知らせ」が出ていました [http://www.lib-yamanakako.jp/news\\_info20060101.html](http://www.lib-yamanakako.jp/news_info20060101.html)（2006 年 1 月 27 日確認）。「ボランティアスピリットとフロンティアスピリットを持って、新しい図書館づくりと一緒に取り組んでくれる方を期待しています。」とあり待遇は 1 年契約、1 日 6 時間勤務（30 分の休憩時間を加えて 6 時間 30 分の拘束時間）週休 2 日（ただし、シフトにより土・日が連休にならないこともあります）失業保険、社会保険、厚生年金あり、平均月収 150,000 円程度とある。山中湖情報創造館はこれと同じ待遇の職員 8 人と館長で運営されているそうです。短期的には悪条件下の労働も仕事の満足感で乗り越えられる。でも少なくとも自活する必要がある人が年収 200 万円以下で働き続けるのは、よっぽどの「ボランティアスピリット」がなければ困難でしょう。

私の勤務先には 5 人の派遣職員の方に来てもらっています。うち 2 人は週 1 日、3 人は週 5 日の出勤です。ILL の処理や目録作成、カウンター業務にも従事していただいております。みなさんとても仕事熱心で本当に助けられています。もと旅行会社の社員の方のカウンター裁きなんて、一度みなさんにお見せしたいくらい鮮やかです。私には言わない不満もあるのですが、「待遇はあまりよくないけれど、図書館の仕事が出来るからいいんです」とおっしゃる。今まで私が接してきた派遣職員の人たちは、サンプル数 10 以下と少ないのですが学校卒業後に数年会社に勤めたり、派遣社員として働いた後に図書館で働くことをめざして司書資格をとったという人たちです。公共図書館や大学図書館の専任職員の職は狭すぎる門だったり年齢制限で無理だけど、図書館で働きたいという人たちの受け皿になるのが派遣であり委託になっているのです。

労働条件のことを考えると図書館での業務委託や派遣職員の活用というアウトソーシングは、正社員・正職員への就職難を背景に、現場の人たちの「好きな仕事だから待遇は二の次で」という図

書館員という職業への愛着、プライドや我慢強さを利用して悪条件で働かせることによって維持されているだけなのではないかと思えてきます。今後、現状が改善されずより競争が激化してさらに労働条件が悪くなるとすれば、能力のある人材をつなぎとめることはできず質の高い図書館サービスなどとうてい期待できない状況もありうるでしょう。

アウトソーシングによって業務を効率化したり経費を抑えること自体を否定するつもりはありません。私自身もともと外注業者の社員として働いていて資料を預かったり大学図書館へ出張しておもに目録作成、たまに装備作業などもしていました。図書館側がしっかりと指示、管理できる能力を保持し、業者をうまく使えばいいのです。でもそれは現場で働く人が不当に悪条件下で働かざるを得ないような状態と引き換えではいけない。発注者である大学図書館や自治体が業者を選定する際に現場で働く人たちの待遇について、仕事に見合った給料（私個人の感覚ではレファレンス対応など図書館の中心的な業務ならフルタイムで最低年収 300 万円）を保障し、労働法規を遵守することを業者選定の際の条件にし、契約に盛り込むなどして受注業者に求めるようなやり方になればと思います。コストは今よりもかかるでしょう。自分で書きながらも非現実的すぎる気がします。でも大学や自治体という社会的により高いモラルで行動することを期待される存在ならば、当然のやるべきことのようにも思うのですがいかがでしょうか。

#### 参考資料

- ・ 脇田滋「労働者派遣法改定の意義と法見直しに向けた検討課題」日本労働法学会誌 96号、p.71-90、2000.10
- ・ 厚生労働省・都道府県労働局（公共職業安定所）「労働者派遣事業を適正に実施するために一許可・更新等手続マニュアル」<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/anteikyoku/manual/>
- ・ 派遣労働ネットワークのホームページ <http://www.union-net.or.jp/haken/>
- ・ 指定管理者制度による公共図書館 - 山中湖情報創造館  
<http://www.lib-yamanakako.jp/index.html>  
(URL はすべて 2006 年 1 月 27 日確認)

たに あいこ（京都ノートルダム女子大学学術情報センター図書館）

## 2006 年近畿 4 支部新春合同例会に参加して

大西 賢人

2月4日、新春合同例会（於：奈良県女性センター）にて、天理大学総合教育研究センター（図書館学）助教授の山中秀夫氏による「ケンブリッジで日本のことをする～英国留学の帰国報告～」と題する講演会がありました。以下、当日の講演会の概要についてご紹介致します。

山中氏は2004年10月から2005年5月にかけて University of Cambridge, Faculty of Oriental Studies にて Visiting Scholar として在外研究をされていましたが、今回の講演会では、イギリスでの生活事情や図書館利用、フランスおよびイタリアの図書館訪問などについて、4つのパート

にわけてお話をいただきました。

**(1) 混乱期 (2004年10月～12月) : 異国環境への順応**

1年間にも及ぶ英国滞在ということで、旅行や短期間滞在とは異なり、「生活をする」ことが必要となります。好景気の英国での部屋探しや住宅事情、インターネット接続環境やTV受信契約のトラブル、銀行口座開設時のハプニング、ケンブリッジ在住の日本人とその家族の親睦団体であるケンブリッジ日本人会の存在、すべてがとまる Christmas Day 前後の様子など、日本とは異なったイギリスの生活事情についてのお話をしてくださいました。

**(2) 安定期 (2005年1月～3月) : 異国図書館での資料収集**

次に、イギリスの図書館についてのお話がありました。山中氏が資料収集のために利用された、Cambridge University Library、Oxford University Libraries、SOAS (University of London)、The British Library における日本語資料の所蔵状況や資料の排架順序、貸出や複写サービスなどについて説明されました。山中氏によれば、大学の紀要が比較的少量なのを除けば、日本語資料は予想以上に充実しているようで、Japanese Union Catalogue : UK

(<http://juc.lib.cam.ac.uk/spcat/spcat.cgi?country=eng&scrcln=1>)や、Bodleian Library CJK Catalogues-Japanese Union Catalogue

(<http://bodley24.bodley.ox.ac.uk/cgi-bin/acwww25/maske.pl?db=gbjpn>)などで検索するのが便利だそうです。また、日本語資料については独自の分類体系をとる Cambridge や DC を採用している BL と異なり、SOAS では、日本語資料が NDC 順に排架されていて資料を探しやすい、とのことでした。

**(3) 活動期 (2005年4月～6月) : 異国図書館訪問**

つづいて、山中氏が訪問されたフランスの Bibliothèque nationale de France (フランス国立図書館)、Maison de la culture du Japon à Paris (パリ日本文化会館)、Association culturelle franco-japonaise de Tenri (パリ天理日仏文化協会)、イタリアの Biblioteca della Pontificia Università Gregoriana (教皇庁立グレゴリアン大学図書館)、Biblioteca della Università Pontificia Salesiana (教皇庁立サレジオ大学図書館)、Vatican Library (バチカン図書館) についての紹介がありました。日本語資料に関しては、図書室と視聴覚室を有するパリ日本文化会館には研究書や参考図書が約2万冊、一方、天理日仏文化協会には小説や漫画などが1万6千冊所蔵されているそうです。また同期間に Japan Library Group (<http://www.jlgweb.org.uk/>) の会議にも出席されたとのことでした。

**(4) 終息期 (2005年7月～9月) : 異国での活動とリハビリ**

最後は、ロンドンでの同時多発テロとの遭遇、現代版修道院暮らしのようなローマ・サレジオ大学での資料収集、そして膨大な量になった資料と本を伴った帰国準備についてお話をいただきました。

今回の講演会は、1年間にも及ぶ英国滞在中に山中氏が体験された生活事情や図書館利用者の面からみた各図書館の様子などについてのお話を伺えて、非常に興味深いものでした。この講演会を通して、日本語資料が海外の図書館において、どのように整理されて、どのように利用されているかについて知ることの重要性をあらためて感じました。当然のことですが、日本語資料は日本だけに存在しているわけではありませんし、その利用者は日本人だけではありません。特に、和古書などは、日本にはない資料が海外に所蔵されている場合もあり、そのような資料へのアクセスを利用者に対して保障するためには、日本以外の海外の状況もふまえた客観的な視点で日本語資料をとらえることがより重要になってくるのではないかと思います。これまで多くの研究者や司書が海外の図書館を訪問し、積み重ねてきた交流や成果をもとに、今後は、機関レベル単位、あるいは国レベ

ル単位といった、より大きな枠組みで協同して国際的な日本語資料の組織化をはかっていく必要があるのではないのでしょうか。

おおにし まさと（京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター）

### 統京大図書館史こぼれ話 第三回

## 京大草創期、図書館を巡って起った対立事件 その2

廣庭 基介

### 2：法科教官と図書館の蜜月時代

先に引用した「要求書」の末尾に署名した法科大学五教授の内、仁保亀松を除いた織田、井上、岡松、高根の4人は、明治29（1896）年から同32（1899）年までドイツに留学している時に、10日に一度はベルリンに集まって、ビールを飲み、帰国後の法科大学の将来について話し合ったので俗にベルリン党と仇名されたということが、斬馬劍禅著『東西兩京の大学—東京帝大と京都帝大—』（講談社学術文庫 853、1988 第1刷）19～20 ページに載っています。

このベルリン党の4人全員が「要求書」に署名して、木下総長に対して、「職務として当然図書整理に専念すべきであるのに、それを後回しにして、職務以外の問題で名声を得ようとして心も身も使うことで疲れてしまい、そのために勤務すべき時間と貴重な公費を無駄に使っている。それゆえ、図書館が学外者まで招いて貴重書や稀覯書の展覧会を開催したり、京大として必要欠くべからざる図書でもない種々の図書を方々から寄贈させるような無駄なことはやめよ。そして島館長よりも京大図書館にとってより良い館長を選任して、帝国大学図書館としてあるべき成果を挙げるようにせよ」と迫っているのです。

このベルリン党の4人は、ドイツ留学から帰国すると、直ちに京都帝国大学法科大学の教授となることが内定しており、留学中に研究調査を遂行するだけでなく、出来るだけドイツの書店を巡って法科用原書を買付けて、附属図書館に送付する役目が課せられていました。

法科大学の図書購入予算は、創設期だけの特別予算であった可能性もありますが、明治32年度から同35年度までの4年間に53,000円という潤沢さでした。因みに、附属図書館の創設年度である明治32年度の図書購入予算は、図書費が何と僅か200円、これに薪炭油類購入費から779円を流用、それに創設用臨時増額図書費1,432円を加えて、合計2,411円に過ぎず、翌明治33年度にもう一度図書費に創設臨時増額600円を加算されて、やっと800円であったのです。

法科大学の図書購入予算を単純に4で除しても1年に13,250円もあったのですから、図書を専門に扱う附属図書館の8倍もの図書費を持っていたこととなります。当時の図書館が大学の中で、如何なる地位を与えられていたか、知ることが出来ます。

附属図書館は、明治32年も押し詰まった12月11日に開館しましたので、その年は僅か20日足らずで御用納めとなりました。翌明治33年1月5日、附属図書館において、島館長、秋間司書、笹岡司書が発起人となって、関西文庫協会の発会式が挙行されました。関西在住の識者や蔵書家、愛書家などに図書館や書誌学に関する知識を上げ、理解を深めて貰おうという学術的な同好会のような団体でした。御存知のように、明治34年4月には会の機関紙として『東壁』第一号を出版し、これが我が国最初の図書館学専門雑誌となりました。

この関西文庫協会に対して、前記のベルリン党の4教授を始めとする法科大学の教官達が、実に好意的に、協力して呉れる時期がやってくるのです。ここまで読んでこられた読者は、「な、な、なんでやね」と驚かれることでしょう。とにかく、その協力ぶりを御覧下さい。

『東壁』第1号(明治34年4月30日発行)の「会報」欄に、明治33年1月の発足例会から本誌第1号発行までの約1年4カ月間の会務を纏めて報告した中に、次のような文言が掲載されています。

関西文庫協会第2回例会は、明治33年3月4日、祇園の梅尾楼<sup>とがのおろう</sup>において開催されました。この会場に來賓として参加していたベルリン党の一人、織田萬法科大学教授は「本邦人の欧米国人に比し常識及公共心の欠乏せる事より論じ起し庶民図書館に就て其設立の最も急務なるを詳論し尚詳細に英、仏、独等<sup>ロンドン</sup>に於ける図書館の制度及英京東部“ホワイトチャーペル”に於ける貧民図書館の状況を説き大に聴衆の注意を惹けり」と記載されました。

続いて明治33年6月3日、京都市尊攘堂に於て開催された第3回例会では、その2カ月前に洋行から帰国したばかりの高根義人法科大学教授が「留学中目撃せられたる欧米図書館の現状に就て先ず欧州各国図書館の状況より説き起して米国に移り其三大図書館として「ワシントン府議院図書館」「ボストン及シカゴ市公共図書館」を挙げ其蔵書の員数建築の坪数人口と図書との比較等を詳論し其構造の美麗宏壮なる実に驚くべく又管理法に就きても非常に発達して他に比類なき先ず世界に冠たるものと言ふも決して過言にあらざるべしとて其の例証を示され殊に閲覧者の健康を保つことに付「シカゴ市図書館」にては新奇なる蒸気機関を用ひて常に良好の空気を絶えず流通して敗気を天井に排除せしめ又室内の温度を始終一定せしむるを以て一たび此室に入るときは何となく精神愉快にして読書に適し其他貸付方法の容易なる昇降器防火用意等の周到なるを論じ又図書館員養成の方法等に就て約二時間以上に渉る演説ありたり」

(次号につづく)

ひろにわ もとすけ(元京大図書館員)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2005年度(大図研会計年度2005.07 - 2006.06)に入っておりますので、2005年度の会費の納入をお願い致します。また、2004年度以前の会費を納入いただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000)です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 dtkk@rg7.so-net.ne.jp までお願い致します。